

問 題 冊 子

国 語	教 科
国 語	科 目
16	ペ ー ジ 数

試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

解答の書き方

1. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に、はっきりと記入すること。
2. 解答を訂正する場合には、きれいに消してから記入すること。
3. 解答用紙には、解答と志望学部及び受験番号のほかは、いっさい記入しないこと。

注意事項

1. 試験開始の合図の後、解答用紙に志望学部及び受験番号を必ず記入すること。
2. 問題の内容についての質問には、いっさい応じないが、その他の用事があるときは、だまって手をあげて、監督者の指示を受けること。
3. 試験終了時には、解答用紙を机上の右側に置くこと。
4. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

〔1〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「ロマンの世界」を作り上げるのは、現実のみすばらしさと、もつと素晴らしい世界への「憧憬」、というふたつの契機である。

「いまここ」の世界よりもっと素敵な世界があるという直観によって、それははじめの芽を持つ。「ロマン的世界」は「いまここ」の現実、つまり日常の世界の否定と、「未来」および「向こう」の世界への「憧憬」を本質的に含んでいるのだ。

ロマン的世界は、たいていの場合、さまざまに与えられる「物語」のかたちで子供の脳裏に住みつく。また絵や音楽のかたちがきつかけとなることもあるだろう。しかし大事なのは、それが必ず現実の「向こう」のもうひとつの「世界」として予感され、したがって、未知の世界の持つ特有の魅力で子供たちを引きつけるという点だ。

ロマン的世界を知らない子供にとっては、じつはまだ「世界」というものそれ自体が現われていない。「世界」とはひとつの構造を持ったものである。「自我」の内側から言うと、それはひとつの未定の中心を持ち、その中心に向かってつぎつぎに新しい光景が開けてゆくという固有の構造を持っている。

それはちょうどファミコンゲームのように、ひとつの場面を知悉する（ちしつ）つぎの場面が未知の魅惑を伴って現われるといったかたちで展開する。つぎつぎに現われる新しい光景は、そのつどそれが何であるかが体験によって知られていく。この際、「未知」として現われたものがつぎつぎに「既知」のものに変えられていくという体験の流れが、「自我」にとっては大きなエロスなのである。

「自我」のはじめのエロスは、他者の承認（母から愛されること）という点に中心化される。この幻想的な「自我」確認は、子供にとってのはじめの能動的な行為である。なぜならそれは、身体的なエロスの直接性からの離脱（断念を意味するからだ）

さて、子供にとってつぎに現われるエロスの（7）ゲンセンは、この「世界体験」ということである。ひとつの「世界」を経験するということとは、その世界と「自我」との間に安定した関係を作り、同時にその世界についてのひとつの説明の体系を作り上げること

だ。子供がつぎつぎにさまざまな世界を経験するとき、彼は、その世界と自分との関係の体系をどんどん押し広げていく。このことはまた、「自我」が徐々に拡大し、強められるという体験でもある。他者の承認が子供にとっては最初の幻想的なエロスの原理だとすると、この何らかの「世界」の中での「自我」拡張ということは、人間における第二のエロスの原理である。

ロマンの世界が子供にとって強い魅惑を持つ理由は、明らかだ。

現実の世界の体験（両親との世界、仲間との世界など）はたしかにひとつの「世界」の体験だと言えるが、そこには絶えざる「挫折」と「断念」が含まれる。現実の世界で「自我」拡張が生じるためには、「他者による承認」ということが不可欠だからである。仲間たちとの世界では、ヘーゲルの言うような「主人と奴隷」の間の相互承認の闘いが必ず生じる。子供は自分の能力を力けて回りの人間の中での「主人」たろうとするが、そこでつねに勝利するとはかぎらない。むしろ現実の世界では、彼はつねに自分の力が全能ではありえないことを思い知らされる。

これに対して、ロマンの世界では「相互承認の闘い」はあらかじめ抜き取られている。そこではただ、「世界」が新しい様相でつぎつぎに現われ出し、その世界を自分のものにしていくという契機だけがある。

ロマンの世界では、現実世界の中でつねにつきまとう「自我」の不安全感は打ち消されているのだ。

たとえば『青い鳥』を読む子供たちは、チルチル、ミチルとともに不思議な世界を、「自我」を脅かされる不安なしに、つぎつぎに体験する。ここでの未定の中心は「幸せの青い鳥」を見つけ出すことだ。その魅惑は、いろんな新しい光景、人物たちを知っていく体験としてゆめめき出すだろう。この「物語」の世界では自分が「主人公」であることが脅かされることはなく、危険や障害は必ずやがて「乗り超えられる」のである。

こうして、子供にとつてはまず、「ケガレた世界」と「ロマンの世界」が、現実世界での「不安」や「挫折」の反映として成立する。

「ケガレた世界」は「自我」解体の怯えの反映であり、「ロマンの世界」は逆にその打ち消しとして、挫折のない世界に対する「憧れ」を映したものだと言える。子供の不安や憧憬ははっきりした「かたち」を持たないため、鏡のようにそのまま映し出されるこ

とはない。そのためにそれは、何らかの像(イメージ)を借りる。「物語」はこのイメージ創出の役割を果たすのである。

恐ろしいユウレイや物の怪の物語を聞くとき、子供たちは「自我」のうちの不安や怯えがめくり返されるのを体験する。またおいしいそうなお菓子や眩い御殿、きらびやかな衣服などに彩られた世界の光景を見るとき、わくわくするような「憧れ」と魅惑をかきたてられる。子供たちのうちのひそかな気分や情緒は、物語が与えるイメージの力によって増幅され、「かたち」を持つようになる。こうして「物語」は、子供の心的な世界の情緒をイメージにおいて増幅しながら、その秩序はそのままに表現する。

わたしたちはここで、人間にとつてのはじめの「価値意識」、「きれい—きたない」の由来を位置づけることができる。

「きれい—きたない」は、言うまでもなく人間に固有の価値秩序である。動物にとつての価値秩序はまず「快—不快」であり、つぎに「安心—不安」だが、これは動物の生命体としての欲望・身体性からの要請が環境世界に対して作り上げている自然な秩序である。しかし「快—不快」「安心—不安」の秩序は、動物的な欲望・身体性の中では、どれほど「高度」になっても「きれい—きたない」(あるいは「よい—わるい」)の秩序に変わることはない。

「きれい—きたない」の秩序が成立するための条件を、わたしたちはすでに見てきた。

それはまず、エロスの原理が「自我」に中心化されること、つぎに「自我」が、本能的な生命の危険ではなく、「他人から承認されないこと」を「自我」解体の重大な不安として受け取るような感受性を作り上げることである。

さらに、「自我」不安の打ち消しとして、より大きなエロスの世界への「憧憬」が成立していなければならない。つまり、「きれい—きたない」という価値の秩序が成立するためには、「ケガレた世界」、「ロマン的世界」という心的世界の固有な秩序が成立していなければならない。

ちように動物的身体にとつて、ある対象はそれが危険、ジヤマ、不気味であるとき「不快」であるように、人間の幻想的身体にとつてある対象は、それが「自我」の不安や怯えをもたらすとき、「きたない」ものとなる基本の条件を持つ。別の言い方をすると、「きたない」という情動の本質には、「自我」の解体や不安の感情を喚起するようなものが必ず含まれている。

これに対して「きれい」なものとは、「自我」の不安や解体の危険なしにエロスの原理を与え、新しい体験のエロスを予感させるような対象である。したがってそれは、新しいエロスの可能性(その直観)と「憧憬」を喚起するような情動を含む。

要約すれば、「快—不快」という秩序は、生理的身体が自然的環境に対してとる基本的態度だが、「きれい—きたない」の秩序は、「自我」化された幻想的身体が「世界」に対してとる基本的態度なのである。

ここで注意すべきは、「きれい—きたない」の秩序は「判断」の秩序ではなく、「感受性」の秩序として成立するという点である。

「きれい—きたない」は、生理身体的な「快—不快」とは違って、人間の生活経験の積み重ねの中でその心的世界の変容として形成された秩序である。しかし重要なのは、いったん形成されたその秩序は、「快—不快」と同様、その形成の由来が意識にはまったく与えられないということだ。

「きれい—きたない」という秩序の底には、「自我」の不安や憧憬という契機がヒソソ^④んでいるが、人はそれを意識することができない。むしろ「きれい—きたない」は、あたかも生得の身体的な感受性であるかのようにわたしたちにとって現われるのである。

つまり、「きれい—きたない」は、「快—不快」とは違った原理と由来を持つのに、「快—不快」と同じように感受化^②身体化されている。人間があるものを「きれい」だと感じるに至るのにはそれなりの理由があるが、しかしわたしたちは、あるものがなぜ「きれい」なのかを知るのではなく、ただそう感じるだけなのである。

このことの意味は、まさしくそのことよって、人間は意味の織物としての「世界」を、単にそういうものとして「知り」、判断するのではなく、むしろただ「感じ」、味わう、ということだ。

「きれい—きたない」という秩序は、基本的に視覚と聴覚を入口にしている。そして視覚的、聴覚的イメージはここで不思議な変容を遂げている。それらは、もともとは中性化された感覚、直接的なエロスを伴わない、認識のための感官^①だったのに、「きれい—きたない」の心的秩序が成立するやいなや、触覚や味覚や嗅覚に代わって、人間が世界からエロスを受け取る際の、中心的な器官、いわば幻想的器官となるのである。

人間の「世界」は言葉の綾糸あやいとによって織り上げられた、「意味の世界」である。ふつう、意味の世界は概念的な理解というかたちでしか捉えることができないと考えられている。しかし人間は「きれいな―きたない」という感受性の能力を持ち、それによってこの意味の世界を、「感じられるもの」、つまりエロスのな「世界」^③に変容させているのである。

(本文は、講談社刊の竹田青嗣『エロスの世界像』に拠る。なお本文を省略した部分がある。)

問一 傍線部⑦、⑧のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①とあるが、筆者はなぜそれを「知っていく」体験」としてとらえているのか。筆者の考えに即して詳しく説明せよ。

問三 傍線部②とあるが、なぜ「幻想的器官」といえるのか。筆者の考えを説明せよ。

問四 傍線部③とあるが、筆者の述べる「エロス」とは人間にとってどのような意味を持つと考えられるか。文章全体の文脈をふまえ、簡潔に説明せよ。

問三 傍線部③をすべて平仮名で書き下せ。なお新旧仮名遣いはどちらでも構わない。

問四 傍線部④とあるが、黄丕烈が翁海村に質問した内容と、特に翁海村に質問した理由を、それぞれ答えよ。

問五 傍線部⑤とあるが、この『論語集解』に対する錢曾の「誤認」の内容を説明せよ。また黄丕烈は、最終的にこの『論語集解』をどのような来歴の本と考えているか、その根拠を示しつつ述べよ。

次の文章は、昭和二年に発表された島崎藤村「分配」の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

私たちの家の入り口へ来て立つような貧困者も多くなった。きのうは一人来た。きょうは二人来たというふうに、困って来る人がどれほどあるかしのれない。震災後は働きたいにも仕事がないと言って救いを求めるもの、私たちの家へ来るまでに二日も食わなかったというもの、そういう人たちを見るたびに私は自分の腰に巻きつけた帯の間から蝦蟇口を取り出して金を分けることもあり、自分の部屋の押入れから古本を取り出して来て持たせてやることもある。中にはそういう物乞いに慣れ、逆に社会の不合理的を訴え、やる瀬のない憤りを残して置いて行くような人々も少なくない。私は自分に都合のできるだけの金をそういう人々の前に置き、

「まっこと困ったら、来たまえ。」

と、よく言い添えた。そして、それらの人々が帰って行ったあとで、年も若く見たところも丈夫そうな若者が、私ごとき病弱な、しかも年とつたものところへ救いを求めに来るような、その社会の矛盾に苦しんだ。正義が顕れて、大きな盗賊やみじめな物乞いが出た。

私たちの家の婆やは、そういう時の私の態度を見ると、いつでも憤慨した。毎月働いても十八円の給金にしかならないと言いたげなこの婆やは、見ず知らずの若者が私のところから持つて行く一円、二円の金を見のがさなかった。

そういう私たちの家では、明日の米もないような日がこれまでなかったというまでで、そう余裕のある生活を送って来たわけではない。子供らが大きくなればなるほど金がかかって来て、また太郎の家のは毎月三十円ずつ助けているし、太郎の家で使っている婆さんの給金も私のほうから払っているし、三郎が郊外に自炊生活を始めてからは、そちらのほうにも毎月六十円はかかった。次郎や末子というものも控えていた。私も骨が折れる。でも、私は子供らと一緒に働くことを楽しみにして、どんなに離れて暮らしていても、その考えだけは一日も私の念頭を去らなかつた。思いもよらない収入のある話が、この私の前に提供されるようになった。

書之所、故誤認為高麗鈔本耳。

(黄丕烈「蕘圃藏書題識」)

〔注〕1 何晏『論語集解』—三国魏の何晏らが、それまでの『論語』に施された注釈を取捨選択してまとめたもの。 2 高麗本—朝鮮で手写されたり出版されたりした本を総称している。 3 『読書敏求記』—錢曾(一六二九—一七〇一)、字は遵王が、自らの蔵書に対して附したコメントを集成したもの。 4 遼海道蕭公諱応宮—遼海は遼河より東、現在の遼東半島一帯を指す。朝鮮半島の北西と接する地域。「蕭公諱応宮」は、明代の人である蕭応宮のこと。 5 監軍朝鮮—明代に蕭応宮は李氏朝鮮への軍隊を監督した。 6 甲午—一六五四年。 7 仍孫—八世後の世代をいう。自分・子・孫・曾孫・玄孫・来孫・昆孫・仍孫の順。 8 京師—都。 9 翁海村—翁広平(二七六〇—一八四二)。海村はその号。 10 『吾妻鏡補』—翁広平は鎌倉幕府の歴史を綴った歴史書『吾妻鏡』を入手し読んだ。『吾妻鏡補』はその読書を契機に翁広平が独自に日本の歴史や文化風俗について調査し、まとめたものである。 11 正平—日本の年号(一二六四—一二七〇)。この『論語集解』に「正平」の年号が記されていた。 12 『日本年号箋』—日本の年号についての書物。

問一 傍線部①をわかりやすく口語訳せよ。その際「予」「之」「公」が何を指しているのかをはっきりさせること。

問二 傍線部②が指し示しているのは何か。最も適当なものを、次の(ア)～(オ)のうちから一つ選べ。

- (ア) 『論語集解』本文の行間に記された朝鮮のハンゲルによる内容の注釈。
 (イ) 『論語集解』本文の行間に記された蕭応宮による李氏朝鮮への軍隊の行程。
 (ウ) 『論語集解』本文の行間に記された錢曾による自身の蔵書についてのメモ。
 (エ) 『論語集解』本文の行間に記された日本の仮名による送り仮名や返り点。
 (オ) 『論語集解』本文の行間に記された翁海村による日本の年号に関する考証。

[4] 次の文章は、蔵書家として著名な清・黄丕烈(一七六三—一八二五)が、自らの所蔵する『論語集解』の鈔本(写本)について述べたものである。これを読んで、後の問いに答えよ(設問の都合で、送り仮名を省いたところがある)。

何晏^{〔注1〕}『論語集解』十卷、有^{〔注2〕}高麗本。此見^{〔注3〕}諸『讀書敏求記』者也。

記云、^{〔注4〕}「此書乃遼海道蕭公諱^{〔注5〕}応宮、監^{〔注6〕}軍朝鮮一時所得。甲午初

夏、予^{〔注7〕}以^{〔注8〕}重價^{〔注9〕}購^{〔注10〕}之於公之仍孫^{〔注11〕}。似^{〔注12〕}遵王之言甚^{〔注13〕}的^{〔注14〕}矣。其^{〔注15〕}実不^{〔注16〕}

然。余^{〔注17〕}向^{〔注18〕}於^{〔注19〕}京師^{〔注20〕}遇^{〔注21〕}朝鮮使臣^{〔注22〕}詢^{〔注23〕}以^{〔注24〕}此書^{〔注25〕}并^{〔注26〕}述^{〔注27〕}行間所^{〔注28〕}注^{〔注29〕}字^{〔注30〕}。

答^{〔注31〕}以^{〔注32〕}此乃日本書^{〔注33〕}。余尚未^{〔注34〕}信^{〔注35〕}之。頃^{〔注36〕}獲^{〔注37〕}交^{〔注38〕}翁海村^{〔注39〕}。海村著^{〔注40〕}有^{〔注41〕}

『吾妻鏡補』。举^{〔注42〕}正平年号^{〔注43〕}問^{〔注44〕}之。海村云、「其年号正平、実^{〔注45〕}係^{〔注46〕}日

本年号^{〔注47〕}。並^{〔注48〕}非^{〔注49〕}日本国王之号^{〔注50〕}。是其^{〔注51〕}出^{〔注52〕}吉野^{〔注53〕}僭^{〔注54〕}窃^{〔注55〕}其^{〔注56〕}国^{〔注57〕}号^{〔注58〕}曰^{〔注59〕}南朝^{〔注60〕}。

見^{〔注61〕}『日本年号箋』。抛^{〔注62〕}此則書出^{〔注63〕}日本^{〔注64〕}。転^{〔注65〕}入^{〔注66〕}朝鮮^{〔注67〕}。遵王但^{〔注68〕}就^{〔注69〕}其^{〔注70〕}得^{〔注71〕}

私たちの著作を叢書の形に集めて、予約でそれを出版することは、これまでとても書肆によって企てられないではなかった。ある社で計画した年度の新しい叢書は著作者の顔触れも広く取り入れてあるもので、その中には私の先輩の名も見え、私の友だちの名も見えるが、菊版三段組み、六号活字、総振り仮名付きで、一冊三四百ページもあるものを思い切った安い定価で予約応募者にわかとうというのであった。私たちはその特筆大書した定価の文字を新聞紙上の広告欄にも、書籍小売店の軒先にも、市中を練り歩く広告夫の背中にまで見つけた。この思い切った宣伝が廉価出版の氣勢を添えて、最初の計画ではせいぜい二三十万ものだろうと言われていたのが、いよいよ蓋をあけて見るとその十倍もの意外に多数な読者がつくことになった。

思いもよらない収入のある話と私が言ったのは、この大量生産の結果で、各著作者の所得をなるべく平均にするために、一割二分の約束の印税の中から社預かりの分を差し引いても、およそ二万円あまりの金が私の手にはいるはずであった。細い筆を力に四人の子供らを養って来た私に取って、今までそんなにまとまって持つてみたこともない金である。

まだ私は受け取りもしないうちから、その金のことを考えるようになった。私たちの家では人を頼んで検印を押すだけに十日もかかった。今度の出版の計画が次第に実現されて行くことを私の子供らもよく知っていた。しかしそんなまとまった金がふところにはいるということ、私は次郎にも末子にも知らせずに置いた。

私は、「財は盗みである」というあの古い言葉を思い出しながら、庭にむいた自分の部屋の障子に近く行つた。四月も半ばを過ぎたところで、狭い庭へも春が来ていた。

私は自分で自分に尋ねてみた。

「これは盗みだろうか。」

それには私は、否と答えたかった。過ぐる三十年が二度と私の生涯に来ないように、あの叢書に入れるはずの私の著作も二つとは私にないものである。長い労苦と努力とから生まれて来たものとして、髪も白さを増すばかりのような私の年ごろに、受けてやましい報酬であるとは思われなかった。

しかし、私も年をとったものだ。少年の時分から私は割合に金銭に淡泊なほうで、余分なものをたくわえようとするような、そういう考えをきょうまで起こした覚えもない。今度という今度は、それが私に起こって来た。私もやつぱり、金でもたくわえて置いて、余生を安く送ろうとするような年ごろに達したのかもしれない。日あたりも悪く、風通しも悪く、午後の四時というと階下^{した}にある冬の障子はもう薄暗くなつて、夏はまた二階に照りつける西日も耐えがたいこんな谷の中の借家にくすぶっているよりか、自分の好きな家でも建て、静かに病後の身を養いたいと考えるような、そういう年ごろに達したのかもしれない。

今でこそあまり往来^{ゆき}もしなくなつて、年始状のやり取り^らぐらいな交際に過ぎないが、私の旧い^{ふる}知人の中に一人の美術家がある。私はその美術家の苦しい骨の折れた時代をよく知っているが、いつのまにか人もうらやむような大きな邸^{やしき}を構え住むようになった。昔を知る私にはそれが不思議なくらいに思えて、あの侘^わしさを友としていたような人はどこへ行つたろう、とそれを長い間の疑問として残していた。年をとつてみて、私も他人の心を読むようになった。あれはただ裕福な人の邸ではなくて、若い時分に人一倍貧苦をなめ尽くした人の住む家だと気がついた。

次郎や、末子をそばに置いて、私は若いさかりの子供らが知らない貯蓄の誘惑に気を腐らした。あるところにはあり過ぎるような金から見たら、おそらく二万円ぐらいいはなんでもないかもしれない。しかし、ないところにはなさ過ぎる金から見たら、それだけまとまった高でも大きい。でも、私は、土の中へでも埋^{うづ}めて置くように、死に金をしまつて置く気はなかった。どうそれを使つたものかと思つた。

どの時代を思い出してみても、私にはそう楽なという日もない。ずっと以前に、私は著作の支度をするつもりで、三年ばかり山の上に全く黙つて暮らしたこともある。私もすでに結婚してから三年目で、家のものなぞはそろそろ単調な田舎生活^④に飽いて来て、こんなことでいつ芽が出るかという顔つきであつたし、それに私たちの家ではあの山の上だからやつて行けたと思うほどの切り詰めた暮らしをしていたから、そういう不自由さとも戦わねばならなかつたし、毎年十一月から翌年の三月へかけて五月もの長い冬とも戦わねばならなかつた。一度降つたら春まで溶けずにある雪の積もりに積もつた庭に向いた部屋で、寒さのた

- 〔注〕 1 薩摩守忠度―平忠度。平清盛の弟。 2 俊成卿―藤原俊成。歌人。 3 鎧のひきあはせ―鎧の胴の合わせ目。 4 勅勘―天皇のことがめを受けること。 5 志賀の都―天智天皇の時代の都である大津京。

問一 傍線部①。ここで数字を挙げたことから、何が読み取れるか説明せよ。

問二 傍線部②。薩摩守のどのような覚悟を表現しているか説明せよ。

問三 傍線部③。この歌集は、「勅撰集」である。同じく「勅撰集」である歌集の名前を二つ挙げ、漢字で記せ。

問四 傍線部④。なぜこの歌が「入れられ」たと考えられるか。問題文全体を踏まえて、考えるところを述べよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

薩摩守忠度は、いづくよりやかへられたりけん、侍五騎、童一人、わが身共に七騎取つて返し、五条の三位俊成卿の宿所に
おはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度」と名のり給へば、「落人帰りきたり」とて、その内さわぎあへり。薩摩守馬より
おり、みづからたからかにのたまひけるは、「別の子細候はず。三位殿に申すべき事あつて、忠度がかへり参つて候ふ。門をひ
られずとも、この際まで立ち寄せ給へ」とのたまへば、俊成卿、「さる事あるらん。その人ならば苦しがるまじ。入れ申せ」
とて、門をあけて対面あり。事の体何となう哀れなり。

日ごろ詠みおかれたる歌どものなかに、秀歌とおぼしきを百余首、書きあつめられたる巻物を、今はとてうつ立たれる時、
これをとつてもたれたりしが、鑑のひきあはせより取りいでて、俊成卿に奉る。三位これをあけてみて、「かかる忘れがたみを
賜はりおき候ひぬる上は、ゆめゆめ疎略を存ずまじう候ふ。御疑ひあるべからず。さても唯今の御わたりこそ、情けもすぐれて
ふかう、哀れもことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ」とのたまへば、薩摩守悦んで、「今は西海の浪の底に沈まば沈め、
山野にかばねをさらさばさらせ、浮き世に思ひおく事候はず。さらば暇申して」とて、馬にうち乗り、甲の緒をしめ、西を指い
てぞあゆませ給ふ。三位うしろを遙かに見おかつて立たれたれば、忠度の声とおほしくて、「前途程通し、思ひを雁山の夕べの
雲に馳すと、たからかに口ずさみ給へば、俊成卿いとど名残惜しうおぼえて、涙をおさへてぞ入り給ふ。

その後世しづまつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありし有様、いひおきし言の葉、今更思ひ出でて哀れなりければ、か
の巻物のうちに、さりぬべき歌いくらもありけれども、勅勘の人なれば、名字をばあらはされず、「故郷の花」といふ題にて、詠
まれたりける歌一首ぞ、「読人知らず」と入れられける。

さざなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山ぎくらかな

その身朝敵となりにし上は、子細におよばずといひながら、うらめしかりし事どもなり。

『平家物語』 一部省略した箇所がある。

めに凍み裂ける恐ろしげな家の柱の音なぞを聞きながら、夜おそくまでひとりで机にむかっていた時の心持ちは忘れられない。
でも、私はあの山の上から東京へ出て来て見るたびに、とにもかくにも出版業者がそれぞれの店を構え、店員を使つて、相応な
生計を営んで行くのにその原料を提供する著作者が——少数の例外はあるにもせよ——食うや食わずにいる法はないと考えた。
私が全くの著作生活に移ろうとしたのも、そのころからであった。

私の目にはまだ、六畳に二畳の二階が残っている。壁がある。障子がある。ごちゃごちゃとした町中の往来を隔てて、魚を並
べた肴屋の店がその障子の外に見おろされる。向かい隣には、白い障子のはまった下町風の窓も見える。そこは私があの山の
上から二度目に越して行った家の二階で、都会の空気も濃いところだ。かつみさん夫婦がかわるがわる訪ねて来て、よく登つて
来たのもその二階だ。そこに私は机を置いて、また著作にふけたが、そのころに私の書いたものが子供らの母さんの女学校時
代の友だちのうわさにも上ったかして、そういう昔なじみの家庭を見に行つて帰つて来るたびに、いろいろ友だちから冷やかさ
れたことだの、「お富さん(子供らの母さん)もずいぶん人がいい、あんなことを書かれて、黙っている細君があるのか。」と言
われたことだの、それをあの母さんが私に話してみせた。でも、そういう人は私の書いたものが古い友だちのうわさに上るとい
うだけでも満足して、にわかに関心する夫を見直すような顔つきであったには、私も苦笑せずにはいらなかった。そのころの私
が自分の周囲に見いだす著作者たちはと言えば、そのいずれもが新聞社に関係するとか、学校に教鞭を執るとか、あるいは雑
誌の編集にたずさわるとかして、私のように著作一方で立とうとしているのもめずらしいと言われた。私はよくそう思った。こ
れはまだ著作で家族を養えるような時代ではないのだと。私もやせ我慢にやせ我慢を重ねていたが、親子四人に女中を一人置い
て、毎月六七十円的生活費を産み出すにすら骨が折れた。そのころの私たちは十六円の家賃の家で辛抱したが、それすら高過ぎ
ると思つたくらいだ。

三年の外国の旅も、私の生涯の中でのさびしい時であったような気がする。もともと、その間には、これまで踏んだことな
い土を踏み、交わつたことのない人にも交わつてみ、陰もあり日向もあるのだからその複雑な気持ちちはちよつと言葉には尽くせ
ない。実に無造作に、私はあの旅に上つて行つた。その無造作は、自分の書齋を外国の町に移すぐらいの考えでいた。全く知ら

ない土地に身を置いて見ると、とかく旅の心は落ちつかず、思うように筆も取れない。著作をしても旅を続けられるつもりのは、かねての約束もその十が一をも果たし得なかった。「これまで外国に来て、著作をしたという人のためしがない。」と言って、ある旅行者に笑われたこともある。でも私は国を出るころから思い立っていた著作の一つだけは、どうにかしてそれを書きあげたいと思つたが、とうとう草稿の半ばで筆を投げてしまった。国への通信を送るぐらいが精いっぱいの仕事であった。それに国との手紙の往復にも多くの日数がかかり世界大戦の始まつてからはことに事情も通じがたいもどかしさに加えて、三年の月日の間には国のほうで起こつた不慮な出来事とか数々の故障とかがいつそう旅を困難にした。私も、外国生活の不便はかねて覚悟して行つたようなものの、旅費のことなどでそう不自由はしないつもりであつた。時には前途の思いに胸がふさがつて、さびしさのあまり寝るよりほかの分別もなかつたことを覚えている。

過去を振り返つて見ると、今の私がか不自由もせずに子供らを養つて行けるといふだけでも、不思議なくらいである。あの子供らの母さんの時代のことを思うと、今の借家ずまいでも私には過ぎたものだ。

「富とみとは、生命よりほかの何物でもない。」

この言葉が私を励ました。

私は旅人のような心で、今までどおりのごくあたりまえな生活を続けたかつた。家は私の宿屋で、子供らは私の道づれだ。その日、その日に不自由さえなくば、それでこの世の旅は足りる。私に肝要なものは、余生を保障するような金よりも強い足腰の骨であつた。

大きくなつた子供らと一緒に働くことの新しいよろこび、その考えはどうか男親の手一つで四人ものちいさなものを育てて来た私にふさわしく思われた。私は自分の身につけるよりも、今度の思いがけない収入を延び行く時代のものほうに向けようと考えるようになった。

私は自分に言つた。

③「いっそ、あの金は子供に分けよう。」

(本文は原則として、岩波文庫『風 他二編』に拠る。)

問一 傍線部⑦、⑧の漢字の読みをひらがなで書け。

問二 傍線部①「いつでも憤慨した」とあるが、「婆や」のどのような気持ちを表しているのか。具体的に説明せよ。

問三 傍線部②「これは盗みだろうか」とあるが、なぜこのように思うのか。わかりやすく説明せよ。

問四 傍線部③「いっそ、あの金は子供に分けよう」とあるが、なぜこのように思うに至つたのか。本文全体をふまえて、簡潔に説明せよ。

国語問題訂正

訂 正

問題冊子 11ページ

[2] 問三 設問の文

(誤) 『これは盗みだろうか』

(正) 「これは盗みだろうか」

